

平成30年度第2回輪之内町総合教育会議

日時：平成31年1月31日

19時00分～

場所：輪之内町役場公室

1. 町長挨拶
2. 教育長挨拶
3. 議事録署名者の選出
4. 協議事項等
 - (1)平成31年度予算について
 - (2)その他

輪之内町総合教育会議委員

町長	木野隆之	教育長	箕浦靖男
教育委員会委員 (教育長職務代理者)	田中俊弘	教育委員会委員	市橋修
教育委員会委員	市橋肇	教育委員会委員	佐久間玲子(欠席)

輪之内町総合教育会議事務局

教育委員会 教育課長	中島良重	教育委員会 教育課主幹	大橋勝弘
教育委員会 教育課調査官	松井均	教育委員会 主任指導主事	近藤富美江
教育委員会 主任指導主事	大久保佳郎	参事	荒川浩
総務課長	田中久晴	総務課長補佐	岩田好弘

(午後 7 時00分 開会)

○中島教育委員会教育課長 それでは、皆さんこんばんは。

少し定刻より早いですが、おそろいですので、ただいまより平成30年度の第2回輪之内町総合教育会議を開催させていただきます。

なお、本日、佐久間委員さんが体調不良ということで欠席の御報告をいただいておりますので、報告させていただきます。

それでは、初めに町長より御挨拶をいただきたいと思います。よろしく申し上げます。

1. 町長挨拶

○木野委員 改めまして、皆さんこんばんは。

31年度いのしし年は、まずは豚コレラからという話で、どうにもならない状況がどうも続いておるようで、知事の頭の中の半分ぐらいは豚コレラ。正月最初に御挨拶にお伺いしたときも、実は余りこっちから豚コレラのことを言うのもいけないかなと思っていましたら、向こうから話がありまして、面会時間の半分ぐらいは豚コレラどうするんだという話で、きのうも会ったんですが、きのうも豚コレラの話だけして引き上げていってしまいましたですね。それはきのうの状況ではね、自衛隊さんまで入ってやっているのに、そういうことやろうなと思っていましたが、どうも昨年の災いが今まで続いておるようで、ことしの感じがどうなるのかなという、ちょっと余り明るい話には、今の状況ではならんのかなと思っていますが。

さはさりながら、やっぱりそれはさておいて、我々は未来への希望をどうやって与えるかというのがかなりの部分に仕事の内容でございますので、余り後ろ向きな話ばかりしておってもあかんと思いますし、とにかく次の世代を担う子供の育成に全力で当たるとのことだと思っております。

実は、今ちょうど31年度の予算編成、おおむね数字が固まってきたところでありますので、きょうお話しできる部分については別途お話があるかと思いますが、その中で、最初の段階です。何か御意見をといっても反映できるかどうかわかりませんが、基本的に何もやらないという話にはならなくて、ことしはたまたま年の前半は統一地方選挙の年でありますので、予算も基本的には経常費を中心とした骨格予算で3月は上程する予定をしておりますので、選挙後、新しい体制の中で投資的経費等の肉づけがされてくるという、そんな形で、今、編成をしております。

ただ、ここ二、三年の傾向ですけれども、ソフトだけじゃなくて、時期を迎えた大規模改修が非常に多くて、億単位で消すに消せないものがいっぱい出てくるんですよね。だから、どうしても予算規模が膨らんでしまいます。そこのところを平準化するための作業もやりつつ、や

っぱりやるべきことはやっていかないかんもんですから、ちょっと財源探しに苦労しておると。そんな状況かなと思っております。

教育委員会の事業を見ておりましたが、やっぱり幾つかハードだけじゃなくて、今ここで方向性を決めておかないと、5年先、10年先に大きくおくらせてしまうというか、特にICT関連について、このところはやっぱり考えをがらっと下敷きを変えないことにはなかなかやっていけないと思っておるような部分もありますし、下敷きを変えることによって、今までの投資の部分とどう整合性をとっていくかという非常に難しい部分もありますので、御意見を頂戴しながら、やるべきことをやっていくということになっていこうと思います。

その機会もそんなに何回もあるわけじゃないですので、議題に上がっているものは上がっているものとして御討議いただくわけですが、それ以外のことも含めて、御自由に意見交換していただければと、そんなふうに思っておりますので、よろしく申し上げます。

きょうは本当に御苦労さまです。

○中島教育委員会教育課長 ありがとうございます。

2. 教育長挨拶

○中島教育委員会教育課長 続きまして、教育長からよろしく申し上げます。

○箕浦委員 こんばんは。

夜分雨の中、お越しいただきましてありがとうございます。

今、学校では、インフルエンザのピークが少し越えたかと思っておりますが、まだまだ休んでいる児童・生徒が多くいます。学校としては、早くインフルエンザの流行がおさまることを願っています。

今日は資料を準備してきました、ちょっと見ていただきたいと思っております。新学習指導要領の改訂の方向が示された資料です。

小学校は平成32年度から、中学校は33年度から新学習指導要領の教育課程となります。

今回の改訂の背景にあるものは、情報化とグローバル化の加速的な進展とAIの飛躍的な進化などが上げられます。また、子供たちが未来のつくり手となるために必要な資質、能力を確実に育むことが必要である。そのために、よりよい社会をつくるという目標を共有し、学校と社会が連携・協議していくことが大切とされています。特にその中で「社会に開かれた教育課程」と「カリキュラムマネジメント」の実現が上げられています。教育課程というのは、カリキュラムを訳したものです。教育内容を学習段階に応じて系統的に配列したものです。要するにもとは、学習指導要領を基準にして進めているものです。

「社会に開かれた教育課程」というのは、地域ともにある学校のことです。

プリントの下のところに今回の改訂の改善事項を10項目上げました。特に大きく変わったところは、上から4番目の道徳教育の充実です。今回道徳は特別の教科という位置づけになりました。今までは「道徳の時間」と言っておりました。教科ではなかったのです。教科と教科以外とどう違うかという、教科には、必ず目標があり評価があります。道徳は今まで評価がありませんでした。今回教科になり、評価が必要となりました。道徳の評価は数値ではなじまない、記述式で行うという方向で進んでいます。

次に外国語の充実があります。これは何度か今まで出ております。小学校の外国語活動です。輪之内町は、3、4年は35時間、5、6年は70時間先行実施しています。本来は移行期間に3、4年生は15時間実施すればよいのです。5、6年生は50時間とればよいのです。

それから情報化教育。先ほど町長さんからお話がありました。来年度から小学校でプログラミング教育を始めます。プログラミング教育は、プログラムの言語を教えるのではなく、プログラミング的な思考を育成するというものです。要するに、いろいろな部品を組み合わせ、自分の目標の動作をさせるよう考えるというものです。言いかえると思考力や判断力を育てる活動です。来年度から、クラブ活動などで試行したいと考えています。

また、中学校の部活動や学校の働き改革に視点を当て、改善に向け取り組んでいきたいと考えています。

○中島教育委員会教育課長 ありがとうございます。

3. 議事録署名者の選出

○中島教育委員会教育課長 それでは続きまして、議事録署名者の選出ということで、本日御出席いただいております方で順番にお願いしたいと思っております。今回は、市橋修委員さんと田中俊弘委員さんでお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

4. 協議事項等

○中島教育委員会教育課長 それでは、協議事項に入ります。

1番目の平成31年度予算についてということで、大橋主幹から説明をお願いいたします。

○大橋教育委員会教育課主幹 お手元のほうに平成31年度教育課所管分の新規・メイン事業の検討事項ということで1枚紙があると思いますが、裏表でありますので、ごらんください。

こちらにつきましては、前回の総合教委会議の折に既に説明をさせていただいておりますが、上げてある項目については変わってはおりません。変わった内容としましては、右から2つ目、当初予算要求額ですね、そこが査定を終わりました変更等がありましたのでまた再度になりますけれども、一通り説明をさせていただきますのでお願いたします。

まず一番最初ですね、1番目ですが、学校司書の配置事業ということで、こちらにつきましては学校の図書館の司書ですが、仁木と福東で1人、大藪と中学校で1人ということで、町内2人で回しておりますが、そのほぼ人件費ですが、前年とほぼ同じですが、378万3,000円ということで予算のほうを要求させていただいております。

次に2番目ですが、情報教育の推進事業ということで、パソコンとか周辺機器等の借り上げ料が主なんですけども、それとあと校務支援システムを29年から導入しておりますけれども、その借り上げ料です。あとは校務用PCの更新ということで、金額が2,081万3,000円ということになっておりますけれども、こちらについて前回のときにタブレットの導入のほうを説明させていただきましたが、先ほど町長さんの話の中にありましたが、ことしは選挙の年ということで骨格予算ということになっておりまして、当初の予算からはタブレットの分ですね、金額的には2,400万円ほどあるんですが、その分がちょっととりあえず外してある状態になっています。

それから次、3番目ですが、鹿児島研修の予算になりますが、こちらについては毎年各小学校4人ずつ、12名が参加をしています。金額的には前年と同額で130万を見込んでいます。

それから、カナダ研修ですが、こちらにつきましても例年どおり2年生の生徒6人ということで研修をしていますので、次年度も行っていきたいということで、金額がちょっとふえておりますが、ふえましたのは、今年度、飛行機会社の都合で飛行機が飛ばなくて、ちょっと苦労をいたしましたので、中部国際空港よりは東京の空港のほうが発着便も多いということで、東京のほうへ一旦行ってから、東京のほうから乗るとということで、予算的に若干ふえております。

それから、英語の教育の重点事業ということで、英語検定の受験料の補助ということでしておりまして、今年度、小学生の児童と中学校と予算で分けてあったんですけども、次年度につきましては一本化して50万の予算となっています。

ちなみに、今年の内訳としましては、今年度、1回から3回受験があったんですけども、受験者の総数としましては107名でした、1回から3回までの合計で。合格者につきましては、第1回目が、30名受験して30名合格。これは小・中合わせてです。第2回目につきましては、34名受験しまして27名の合格でした。第3回目は、43名受験をしていますが、まだちょっと結果は出ていないということで聞いています。受験の結果としては、合格率は高いなということを感じています。

続きまして、同じく英語の関係ですけども、英語の教育支援員の配置ということで、3小学校に2人配置をする費用になっています。こちらも前年と同額で140万の予算です。

それから、特別支援員の配置ということで、福東小学校に3人、仁木小学校に4人、それから大藪小学校に4人、中学校に2人ということで、総額で1,386万円ということになっていま

す。

それから、プラネットプラザの管理事業ということで、図書館等の費用になりますけれども、図書の購入費でありますとか、プラネットプラザ関係の施設の保守点検、それから施設の修繕等で、合わせまして4,797万5,000円となっています。

裏面のほうをお願いします。

裏面の一番上ですが、福東小学校の大規模改修工事ということで、改修工事のほう、全面改修ということで、27年度から仁木、大藪と進めてきまして、来年度は福東小学校の改修工事をするということになっております。金額としましては3億7,733万2,000円の予算です。同時に、あわせまして仁木と大藪にも設置をしました太陽光発電の設備を設置するというので、2,770万4,000円の予算を計上させていただいております。

それから、留守家庭の事業につきましては1,735万5,000円ということで、金額のほうが上がっておりますが、こちらのほう、やはり入られる児童がふえてきておりますので、それに伴って増額ということになってきております。

それから、続きまして中学生の防災教育の推進ということで、防災士の育成にかかわる事業ですが、中学2年生を対象にしまして、講座を開いたり、受験料を補助したりしています。こちらのほうは160万2,000円ということで、ほぼ今年度と同じ金額で要望しておりまして、今年の実績でいいますと、98名受験しまして71名が合格ということで聞いています。不合格だった方につきましては、3月末までに何とか追試ができるかと聞いていますので、また追試をされるということです。

それから、歴史・伝統文化アーカイブス事業ということで、こちらにつきましては、歴史民俗資料館等の資料について整理をしたり、展示の方法等をこれから考えていくということで、来年度につきましては、歴史資料のデータ化でありますとか、ホームページ公開用の資料作成の person 費ということで16万2,000円を計上しています。

それから、学校給食のほうですけれども、学校給食の管理事業としましては4,910万6,000円ということで、若干金額が上がっておりますが、その4,900万のうち調理業務委託に係る分としましては、平成30年度の途中から調理業務を委託しておりますので、30年度としましては1,787万4,000円の予算だったんですけれども、31年度については4月当初から調理業務の委託費用がかかりますので、1年分ということで2,776万3,000円の予算を計上しています。

そういうことで、来年度の予算について説明を終わります。

○中島教育委員会教育課長 ありがとうございます。

では、こちらの予算について御質問等お願いいたします。

○田中委員 一番最初の学校司書ですが、去年が371万5,000円で、今年378万3,000円とふえてい

るが、これは日当、単価が上がったのか。勤務時間が変わったのか。

○中島教育委員会教育課長 社会保険料のアップを見込んであります。

○田中委員 わかりました。

○市橋（肇）委員 2番目の先ほど説明の中では、タブレットについては除外することにしたという理由が何かいま一つちょっとよくわからなかったんですけど、基本的には行く行くの目玉として、タブレットの数をふやして、この教育を充実させましょうということを前も言っていたと思うんだけど、ICTの基本方針をつくられたり、いろいろ取り組みを考えられている中で、そういう見直しを行うことがいろいろな進捗に影響を与えないかどうかということは考慮されているわけでしょうか。前は目玉だったわけですね、タブレットを増設するということが、違いましたか。

○大橋教育委員会教育課主幹 そうです。

○市橋（肇）委員 大きな目玉として計上されていると。そういう何か方針がすごく揺れるような感じがするんだけど、その辺は大丈夫でしょうか。

○大橋教育委員会教育課主幹 方針が揺れるということではありません。

○市橋（修）委員 計上する時期がちょっとずれるよということですよ。

○市橋（肇）委員 ああ、そうですか。それで、決して取り組まないということではないんですね。

○田中委員 町長さんの任期があと少しで終わるので次は選挙をやるということになるので、そうするとここの任期が1カ月か2カ月のときに1年分のやつまでつくってしまっただけは、次の人が俺はこういう方針でやりたいと言うときに、その枠を残していかないかんので、ここのときにやるのは1年間でもう動かない確実に要る分だけつくっておいて、骨格予算と言うらしいんだけど、次の人になったときに、タブレットをやる方針を新しい町長さんに理解してもらってやるというふうにしますと。だから、今は基本的な、どうしても要るその分だけを書きましたという意味でしょう。

○大橋教育委員会教育課主幹 はい、そうです。そのとおりです。

○市橋（肇）委員 ただ、僕はよくわからないですけど、同時にかかられているこのプラン、こういう中ではタブレット端末をふやしていくような案になっているわけだから、こういう考え方とこういう予算づけとがそごができていようでは、何かおかしいんじゃないかというふうに思ったんですけども。

○木野委員 そごという意味では決してありませんので。基本的に骨格の考え方というのは経常費だけ計上ということですから、骨格が例えば半年も先の話なら別ですけども、これで骨格から計上へ復元するのは6月の予定です。したがって、ほとんど事務上もおくれない、そうい

う前提での話です。半年もおくれる話なら、計上します。

そういうことで、ほかのものを外したのもほぼ、事務的に考えたときにおくれないものだけ外していますので。ですから、そういう意味でいうなら、大規模改修だとか何か補助事業との絡みで当初から計上しないとだめなものは、4億を超えるものでも当初から入れていますので、そういう意味では事務事業の整理はしているというふうに御理解いただいて結構です。

○市橋（修）委員 9番のメインの事業で、図書購入費の欄は前年度よりも減額されていますね。

○大橋教育委員会教育課主幹 はい。

○市橋（修）委員 理由としては何ですか。

○大橋教育委員会教育課主幹 今年度は、プラネットプラザに浄化槽がありまして、それを下水に接続するという工事費とかも入ってまして、今年度がちょっとふえていたという感じになっていて、来年度についてはその大きな工事がないので、その分が減っています。

○市橋（修）委員 なるほど。

○大橋教育委員会教育課主幹 図書の購入費とか、そういうのは前年並みで変わっておりません。

○市橋（修）委員 わかりました。

○中島教育委員会教育課長 その他はよろしかったでしょうか。

（「はい」と呼ぶ者あり）

○中島教育委員会教育課長 ありがとうございます。

○木野委員 一言だけ。

○中島教育委員会教育課長 はい。

○木野委員 私はヒアリングした立場ですので、それ以上言うあれはないんですけども、1つお願いしておきたいのは、いろんな意味で、これは来年以降、新たな事業を仕掛けるシーズを埋め込んでいるつもりなんです。だから、そのシーズを大事にしながらやっていただかないとだめなので、例えば学校司書の配置事業一つとってみても、これは例年並みなんですけれども、これは別にこういう形で配属していないところだっていっぱいあるんですよ。これをなぜ配置しているか。これは、基本的には学校に図書教諭という方がお見えになるはず。その人たちと幾つかの方向性を議論しながら、学校の図書館のあり方というものについて、少しきちっとしたものをつくってほしいという思いが一つあります。そうでないと、これは単に人件費をつけただけで終わってしまうんで、そこだけお願いしておきたいと思いますし、ほかもみんなそうなんです。みんなこれがどういうふうに育っていくやろうなという思いを込めながら予算づけしているんで、そこだけはちょっとお願いしたいなということで。

それと、たしかアーカイブス事業は後からつくべきだよ、これ。

○中島教育委員会教育課長 はい。

○木野委員 これでもいいんですけど、アーカイブス事業なんていうものは、やっぱりきちっと継続してやって、その成果をどういう形で町民の皆さんにフィードバックしていくかという、まさにそこが問われている話なんで、単純に記録して積んでいだけじゃあ何の意味もない話なんで、これをどうやって還元するかということですね。今年度の事業の中で考えてほしいなど、そんなふうに思っています。

ほかにもいろいろヒアリングのときに言ったことは幾つかありますので、ひとつよろしく。

○中島教育委員会教育課長 ありがとうございます。

各事業については、方向性とか、これからどうしていくかということをはっきりさせていきたいと思います。お願いいたします。

それでは、その他のほうになるんですが、本日お配りしてあります輪之内町学校教育の情報化プランと、それからコミュニティ・スクールについて資料を配付させていただいておりますので、まずは学校教育の情報化プランの案について、大久保先生のほうより説明をお願いしたいと思います。

○大久保教育委員会主任指導主事 よろしく申し上げます。

では、お手元の資料、輪之内町学校教育の情報化プラン（案）【2019年度～2023年度】をごらんください。

まずもって、輪之内町が情報化によってどういう教育を目指したいのかといったところについて、まず話をさせていただきます。

お手元の資料の9ページをごらんください。

第2章の部分に書いてありますけれども、まず下のほうですね、四角く囲ってある中ですが、全ての教員が、ICT機器を従来型の学習形態（板書・ノート・説明・体験活動等）と融合させて活用するとともに、情報活用能力を段階的に指導し、学習の基礎となる資質・能力を育成します。また、子供たちが仲間と協働しながら主体的・対話的で深い学びができる授業を創造するための指導改善に努め、子供たちに「生きる力」につながる確かな学力を育む教育を実現しますというふうにうたっております。

これを輪之内町の教育大綱及び教育振興基本計画に基づく位置づけでいきますと、その下の部分に書いてありますけれども、「たくましく心豊かな人づくりの推進」の中に「情報教育」の部分では、「ICTを活用し、情報化社会に主体的に対応できる力を育てる」ということを重点目標の一つに位置づけております。学校ICT環境の整備を図って、さまざまな場面での効果的な活用、児童・生徒の情報活用能力の育成、情報モラル教育の推進を目指すこととしていきます。

また、新学習指導要領に対応するよう、ICTを効果的に活用した指導方法等を確立すると

ともに、授業の実践研究に取り組む必要があります。

本計画は、学校 I C T 環境の整備における、これまでの継続した課題や今後の教育環境の変化等に適切に対応し、教育の方向性を示すために立てさせていただきました。

では続きまして、今話をした部分で言いますと、教育を取り巻く環境がどのようになってきているのかとか、国が示すこれからの方向とは何かについて話をさせていただきます。その内容を受けまして、この基本計画が位置づいている部分もあります。

一番最初、1 ページに戻ってください。

一番最初に国の動向が書いてありますが、特にいいますと、次期学習指導要領の中では、たくさんそこに書いてありますけれども、例えば一番下の部分でいいますと、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成という、単にコンピューターを使うということが、教科横断的ですね、さまざまな教科で共通する部分という意味なんですけれども、その中でどう力を育成したいかというところを示しています。情報活用能力の育成を図るために、各学校において、コンピューターや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることというように学習指導要領にはうたわれております。

情報活用能力を言語能力と同じように、つまり話すとか書くとかという基本の部分ですね、同じように学習の基礎となる資質・能力と位置づけてあるということが大きな部分だと思っております。

続きまして、2 ページの部分で話をさせていただきますと、では国はどのようなところを目安にして各市町村に整備をするかという指針を示しております、その表になっているところですが、左側には I C T 機器とあって、各 I C T 機器の名称が並んでいます。その右には、どの程度整備するかというところが示してあります。輪之内町は、どの項目についてもほぼ満たしている状態です。

続きまして、学習指導要領以外での、その下、3 番ですね、第 3 期教育振興基本計画といった中にもさまざまな位置づけがされております。I C T 利活用のための基盤整備であるとか、それから右ページに行きまして、情報活用能力の育成においてはどんな力を育成するかとか、どういったことを気をつけるかだったり、それから各教科等の指導における I C T 活用の促進というところでは、さまざまな教科で多様性のある学習を通して子供たちに力をつけなさいよといったところを示していますし、校務の I C T 化による教職員の業務負担軽減及び教育の質の向上とあります。これは、もう既に輪之内町では校務支援システムを導入しておりますけれども、これによって先生たちの校務にかける負担というのかなり軽減されているのではないかと考えております。

そして最後、学校のICT環境整備の促進というところでは、30年度以降におけるICT環境の整備方針に基づいて、学習者用コンピューターや大型提示装置、超高速インターネット、無線LANの整備など、各自治体による計画的な学校のICT環境整備の加速化を図る。あわせて、教育情報セキュリティポリシーに関するガイドラインの普及や改定など、学校における情報セキュリティの確保に取り組み、教師及び児童・生徒が安心して学校でICTを活用できる環境の整備を促進する。また、地方公共団体へICT活用の専門家を派遣し、各地域におけるICT環境整備推進に向けた課題解決を支援するといった内容についてうたっております。

輪之内町についても、専門家の派遣といった部分についてはまだ課題がありますけれども、情報セキュリティのポリシーの整備を初め、さまざまなICT機器を使うための整備というのも今進めていこうとしているところです。

といったところが、今回私たちがICT機器を整備しようとしている大きな環境という中であります。

続きまして、その次、4ページに当たりますけれども、現状ではどうなのかというところも少し示してありますけれども、先生たちの活用としては、これは平成29年度のデータになりますけれども、授業においては、全授業、つまり教育課程に示されている標準時数ですね、その全時数の合計に占めるICT機器を使った授業の割合というのは65.2%でした。かなり高い割合で先生たちは授業の中で活用してくれているということが見えてくると思います。

また、その下につきましては、他の市町と比較した輪之内町におけるICT機器整備状況というものが示してありますが、右のほうには岐阜県内の各市町の状況が示してあって、輪之内町は赤で囲ってあるところですが、どれもほぼ県の中でも上位ですね。国が示すレベルにおいてもほぼ満たしている状態と考えていいと思います。

今ずうっと話をしてきましたけれども、こういったところを推進していくために、ではどういう整備づくりとか、どういった指導をしていくのかといったところについて、次、説明させていただきます。

10ページ、11ページに示してあるところです。

まず、10ページの下の方になります。体系的な情報教育の推進をしていかなければならないと思います。つまり、全教職員が共通実践によって子供たちを育てるということです。

各教科及び総合的な学習の時間等、学習活動の中に情報教育の内容を位置づけ、情報活用能力を育成します。そのために、各教科等の指導計画の見直しを図ったり、または町教育委員会の訪問であるとか研究実践発表会、それから校内研修の指導案等にICT機器を活用する場を位置づけていこうと思っております。

2点目は、情報活用能力の育成に系統性を持たせて、小・中学校それぞれに段階を踏まえた

ものを今整備、情報活用能力段階表というのが輪之内町では整備されておりますので、それを着実に先生方が実践するというを考えています。

また、情報モラルにつきましては、平成29年度に輪之内町情報モラル宣言が策定されましたので、それに基づいて正しいネットの使い方についても指導していこうということです。

次、大きい4番ですが、教員のICTを活用した指導力や授業力を高めるための支援体制の充実ということです。

先生たちに使ってもらえるためにどういう支援をすとか、授業力を高めるために我々がどうサポートできるのかといったところなんですけれども、輪之内町には情報教育主任が集まるICT活用部会という組織が位置づけてありますので、その中で、輪之内町教育委員会が中心となって、そういった会を定期的に位置づける中で、研修と実践のサイクルを密になるように図っていこうと思います。

また、各校での情報主任は、授業提案とか教材作成、ICT機器準備など、さまざまな授業の中でICT機器を活用していただけるように、各校でそれぞれ動いていただこうということです。

そして、定期的に教員のICT活用指導力と活用率も見直しながら、その問題点に対しても適切に対応できるように、教育委員会のほうから支援、助言をしていこうと思っています。

あとはそこに示してあるとおりです。そのような体制の中でやっていこうと考えております。

一番最後のページになりますが、これは今後ICT環境をどのように整備していこうかという大まかな計画であります。以上です。

○中島教育委員会教育課長 ありがとうございます。

では、こちらのプランの案について御意見を賜りたいと思います。

お願いします。

○市橋（肇）委員 質問ですけど、8ページの国の指標と輪之内町の現状ということで、国が今方針として出している指標に対して、輪之内町というのはすごい進んでいて、もうほとんどいいんですけど、このICT支援員なるものというのはどんなもので、未配置であることがすごいハンディキャップになることなのかどうか、どういう影響のあることなのか、ちょっと教えていただきたい。

○大久保教育委員会主任指導主事 例えば近隣の市町でいいますと、岐阜市とか大垣市は、その制度を導入しているというふうに聞きます。これは企業のほうがそういったサービスを提供してくれているものなんですけど、年間の契約で、例えば輪之内町なら輪之内町で、何十時間、授業の中に入ってICT機器の活用の部分で支援しますよという、そういう契約を交わすんですね。必然的に各学校に何時間ずつというような割り振りになっていって、その割り振りの時

間の中で、各学校からは何月何日の何時間目にじゃあ来てくださいというような要望を教育委員会に上げて、それを企業のほうに伝えて、そこから派遣されてくるというようなシステムなんでしょうけれども。

○市橋（肇）委員 その企業なるものは、教材メーカーだとか、そういったものなのか、それとも単純にプログラマーとか、システムエンジニアとか、そういう人たちを指しているんですか。

○大久保教育委員会主任指導主事 私が知る限りでは、教材会社ではないんですけども、例えば中のソフトウェアですとか、それからあとはパソコンとネットワークをどうつないでやるのかと機器の活用の部分についての専門家ですので、授業の中で教材の本質に入り込んだアドバイスといった部分ではないんですけども、そこはやっぱり教員のほうがメインで考えていかなければならない部分ですけども、教員がこんなことをしたいということを伝えることで、その支援員の人が、ではこういった使い方ができますよ、機器をこういうふうに配置して、子供たちにこういうふうに使わせるといいですよというような提案をしていただけるといいます。

○市橋（肇）委員 そうすると、そういうニーズが出てきてから対応することでも遅くないという解釈でいいんですか。

○大久保教育委員会主任指導主事 そうですね。

○市橋（肇）委員 先取りするものじゃないということですね。

○大久保教育委員会主任指導主事 形ありきで、先生たちにやりなさいというやり方もやれるんでしょうけれども、なかなかそこまでちょっと私たちは踏み込めていないです。先生たちがこういうふうにしたいというところの中で、じゃあこうサポートしますというふうで教育委員会としてはサポートしていこうという来年度の方針ですが。

もう少し言いますと、まず基本的な部分で理解してもらわなきゃならないもんですから、タブレットを導入していただけたらなれば、新しい機器ですので、その導入の研修会ですとか、例えば教育委員会から1人派遣して、誰かが1時間だけでも授業、例えばプログラミング教育ですね、こんなふうに使えますよみたいなこともやれると思っています。そういったことは描いています。

○市橋（肇）委員 ありがとうございます。

○箕浦委員 輪之内町は、何年かな、今、仁木小の長屋校長さんが、割愛で教育委員会で勤務されていました。その当時は情報教育に町が力を入れておりました。割愛は、普通は各町に1人ずつぐらいしか入っていませんでした。平成10年ごろかな、2名体制になったんです。主に輪之内はそういう意味で情報教育の担当主事さんが見えるので、情報教育が進んでいました。

そういう意味では、大久保先生も得意ですので、ぜひともまた指導していただきたいと思っておりますので。

○木野委員 ヒアリングの中で私が言ったことを覚えておると思うけど、基本的に今ハードをそろえて情報化推進をうたうような時代ではない。もちろんおくれないようにハードの整備をすることは大事だけれども、それ以上に必要なのは、それを扱う人、それをどういうふうに教育なり何なりしていくことが大事なんで、それが置いていないと宝の持ち腐れになっちゃうよということはヒアリングのときに申し上げたつもりなんです。

そのときに、予算要求の中に、ソフトの部分の予算要求ってどこなのと聞いた。覚えていると思うけど。なかなかこの数字の中で出てきていない。さっきいみじくも市橋委員がおっしゃったように、その部分というのは、例えばICT支援員にしても、それからさっき大久保先生が言った、要はICT支援員の中身って何よといったら、機器を使いこなすためのエンジニアなのか、それとも教材活用にまで踏み込んで効率的に学習効果を上げるための提案ができるような、そこまで踏み込んでいるのかと。

というのは、さっき教育長が言ったけれども、昔、情報化教育をやっていて、先進と言われていた時代の実態を見ると、私の評価するところによれば、その人たちが学校を走り回って、こうすればうまく使えるとか何とかいって、言ってみればハードの機器の限界をだますための作業を一生懸命やっていたんですよ。今は、そういう意味の限界はもうほとんどない、教育要領にしても何にしても、やろうと企画すれば何とかできる状況やから。逆に言うと、今こそ支援員の必要性があるやろうという気がしておるんですよ。

それで、ここの中に書いてあった、これはまだ案の段階で、もう一つ大きな問題を抱えているんやけど、それはまたちょっと後で言いますけれども、今のこの段階で言えることって何やろうなと考える必要があると思うんですよ。その辺についてはどうなんですか。

○田中委員 町長さんが言われたこと、結局同じことを言おうと思っていたんですけど、昔、ICTで輪之内が進んでおるといのは、小さなまちでお金があったので、ほかの大きな箱物を、コンクリートをつくっておらへんかったので、お金があったんで入れただけなんやね。

それを多分、支援員といって岐阜市が何人って、岐阜市はこの間まで全然入れていなかったもので、それで各学校、とりあえずパソコンを立ち上げて、どうやってスイッチを押すとかいうの、要るやん、人がな。ここはいいんやよ、大久保先生に電話をかけてどうやってやるのと言えばいいので、そんなのは64校もあつたらできないので、こういうのが要るんやね。でも、多分機械を使うだけのことなんやね。ソフトも既成のやつを使うだけなんで。

さっきのこのグラフを見ても、国の基準よりも何%ですとかいう話になるんだけど、輪之内が先というのはもう一歩先で、新しい先生たちが赴任して挨拶を聞いておると、ICTが盛ん

で非常にいい、憧れて来ましたと言われたけど、そんなのはみんなやってくるので、今、僕、輪之内がやらなあかんのは、うちらは教育をやっておったら、こういうようなことがやりたいとか、こういうようなソフトをつくってほしいとか、あるいは既成のソフトを組み合わせると、こういう教育効果ができるかということ、今、大久保先生がやってくれることは大事やけど、そういうことを検討する会か、検討する機会が、多分町長さんのソフトの面というのはそういうことやと思うんだわ。一太郎とか、そういう話じゃなくて、どうやって一太郎を使いこなすと教育効果があるかとか、いい子が育つかとかいうことをやらないと、今やっておられるのは、僕が聞く限りでは、各学校から先生が代表で1人か2人ずつ来て、こうやって使いこなすんだよというのを学校の中でこうやって教える話なんで、使い方を。そうじゃなくて、ICTを使ったらどういう効果が上がるかとかいうことをそろそろ検討し始めないと、多分よそがやっているのとか国がやっているのも、結局パソコンを買って、ソフトも買ってという話しか聞かえないよね。もうちょこっと先へ行かないといけない。

○木野委員　そこが一番難しい。

○田中委員　うん。例えばワードを使ったらこんなことができるかとかというような教育に対して、例えば、もう20年ぐらい前ですけど、医学部へ行くとエクセルの授業があったんだってね。医学部やで研究をやるプレゼンテーションが要るので、エクセルをどうやって使いこなすかというのを、先生方がどうやったか知らんけど、あるという話を聞いたことがあって、ああいう、例えば、医学部やったらそういうことになるんやけど、もうちょっと違う形だけど、あるいはそこで答えが出てこないかもしれんけど、先生たちがどうやって使いこなしたらいいだろうと日ごろ考えている下地をつくってあげないと、これ以上ICTをやるべきかどうかも含めて、このぐらいでチョークでやったりやるのがいいんだとかという結論かもしれんけど、それを誰か検討しないと、何かこれ、電気屋さんなのか、コンピューター屋さんに調子に乗せられて予算を吸い上げられるようにも見えてしまうので、本当に要るんだということをやらないと、今、輪之内はよそより設備がいいので、みんなの憧れなんだけど、やったのがあれなら黒板にチョークで書いたほうがいいぞということになってしまうんだったらチョークでいいんやで、それを検討するのが今弱いような気がする。

○木野委員　そこが一番今議論になっているところなんで、それを逆に言うと、ICT支援員って何をやるのと聞いた意味が、そこら辺に出てくるということなんですよ。

だから、今までの先生方というのは、機材がそろっていない中でも、例えばB紙にいろんなものを、自分の指導の順位を頭の中で整理して、こういうものがあると理解しやすいだろうというようなことを一生懸命教材を考えてやってきた。その手間を考えることを省くんじゃなくて、考えて、それを生徒に伝えるための手段としてのICT環境の整備でないと、私は意味が

ないと思っているので、その部分でICT支援員をどう活用するかということならすごく意味があるし、そういうところで人が欲しいということならば、実はここにICT支援員を配置するって、そんなに難しい話じゃないんですよ。そのかわりどこかが省略化できるはずなので。トータルで考えたときに、この部分は配置しないという選択肢は今持っていないんで、やればやれると思っている。だから、教員のやること、それを支援するサポート組織、それにはソフトだけじゃ対応できないのなら、こういうハードも要るよという発想の中で、このICT化は当然やっていくべきだろうし、そういうことができる状況になった。

先生はオブラートに包んで言っているんで、もっと言うと、買って来た教材を最新のハードに載せて、ここ映ったよといっているんじゃない、それは何の意味もない話になっちゃうんで、もっと言うならば、買って来た教材に自分の思いを乗せるような部分をどうやって、支援員に手伝ってもらっても何でもいけれども、東京の教科書会社がつくったデジタル教科書に何を輪之内の先生はそこに思いとして乗せてやれるのかと。デジタル教科書の副教材でも構わないですよ。余り構っちゃうといろいろ課題が出てくるんで言わないけど、そういうことだと思っていますよ。

○市橋（肇）委員 この間1月23日に安八郡の教育研究大会があったんです。それで、ホールに先生たちが今年考えた補助教材を一生懸命並べていた。なぜあれが出てくるかということ、結局そういう教材会社も気づいていない補助教材を先生方がつくっていると。あれ、結局、過重労働だとか何とかということにもつながっていくんだけど、あと教材メーカーは、ああいうニーズがあるということをつえたら、あれは絶好のチャンスだということで、あそこには教材メーカーは来ていなかった。営業なんか売りにくるだけで。通常は来るんですよ。どういうニーズを先生たちというか、ああいうものをどういうことを言っていらっしゃるか、あんなホールに陳列されておって、表彰したり何かする対象になっているじゃないですか。商売の種なだけで、誰も来ていなかったんであれなんですけど、僕は個人的にいうと、支援員なのかシステムエンジニアか、僕はよくわかりなんですけど、ああいう苦勞をしていらっしゃる人を助けていけば、いい教材になって、みんながもっと教育の効果も上がっていくんじゃないかなという発想を持った。

あと、IT企業に勤めていたような人で、退職してきて、時間があるような人がいたら、そういう人なんかを採用してやったら効率も上がるんじゃないかなと。システムエンジニアって、結構寿命が短いというか、疲れちゃう人たちが多くいて、そういう趣味程度にやることだったら余り精神的負担にもならないし、過重労働にもならないんじゃないかと思って、輪之内もそういう人がいるといい。あいにく私なんか役に立たんほうなんでだめなんですけど、そういう人がいたらいいなとはちょっと思ったんですね。それがもともとの発想です。

○木野委員 本当にシステムエンジニアは旬の時期が短いというのはよく言われる話なんですけれども、学校教育で必要とされる部分においていうならば、そんな最先端を行っている人じゃなくても十分やれるはずなんですよね。ツールとして見た場合には、そんなにレベルの高いものじゃなくても十分活用できると思うので、問題は教材活用の中で、それをどういうふうに組み込んでいけるかだけの話なんで、おっしゃるとおりだと思いますよ。そんなに費用をかけなくたって、正直言うと、できると思う。

○田中委員 さっき、これが始まる直前に、6時40分ごろにNHKのテレビで、大垣市が前倒しで2学期からプログラミング教育をやりますとあって、こうやって、この間、長屋先生やったっけ、輪之内中学校でやられた、あれと同じやつをやってみえた。

これは、子供に教えたら、先生が教えるよりも、最初にやり方を教えたら、先生に悪いけど、子供が先に行くなと思うんやね。僕、それでいいと思うの。

でも、将来的にタブレットの時代になってきたときに、早い時期からタブレットに触れさせておかなあかんということは、大きな方針としてはわかるんやね。今さら古いやつをやっておるわけにいけへんで、時代の流れでそれはさせなあかんのやけど、でもそのあれは教材屋が売る話で、彼らのほうがはるかに先に行くなと思う。そのときに、行ったときに、それを先生たちと競争しておったら、申しわけない、先生が負ける。子供らが勝つ。大学生を見ておると、そう思う。

そうすると、そのときにどういう手を打てるかというところを、あるいは基本的に、大砲でいくと砲台だけつくっておいて、彼らは鉄砲をつくるかもしれん。そここのところはやっぱりちょっと議論して、先生たち、これからあるべき子供の姿と教育長さんの今言われた方針とあわせて、子供のあるべき姿、何が役に立つかというのは、やっぱりオリジナルで考えんと僕は思う。使い方はもういい、子供のほうが先やで。

○木野委員 そのうちに、変な話だけど、使い方なんか勉強しなくたって、すぐ何でもできるようになるんですよ、使い方という意味だったら。

そうじゃなくて、そこに込められている物事の順番だとか、物の組み立ての考え方とか、大久保先生、さっき言ったじゃないですか、プログラミング的思考をどうやってやっていくかという。プログラミング的思考を逆に育てなくてもできちゃうのが今の最先端の技術だとも、ちょっと乱暴な言い方けども、言えるんですよ。余計なことを考えんでも、このボタンを押したら、これが出てくるという話になっちゃう。でも、ボタンは出てくるんじゃないで、それってどういう考え方の中でそれが出てきたのということを考えさせるのが学習だとするならば、ちょっと立ちどまって考える必要があるということはあると思う。

タブレットってブラックボックスみたいなもので、押せば何かが出てくるよという話なんや

けど、昔の、余り昔のことを言うとだめだから言いませんけれども、98なんて言ったって知らないでしょう。

あのころは、この部品って何をやる部品なのかなということから考えて、こいつをいじるともうちょっと拡張できるなとか、何とかかんとか言いながらやっていた、そういう時代ですよ。そこへ戻れとは言いませんよ。でも、そういう部分がどこかで楽しむ部分があってもええのかなという感じがする。

ついでに言うと、大垣市が支援員を云々という話は、大垣はそういう土壌がありますよね、ソフトピアジャパンという。そっちのほうへ関心を持たせざるを得ない外的環境がそろっておる。余計なことをやりたくないとは本当は思っておるかもしれんけれども、あそこでやる以外に最先端のものは出てこない。だから、やるんですよ、あそこは。ソフトピアがある限り、こうもりの先っちょの部分が絶対にあそこから出てくることは間違いない。

○田中委員 結局コンピューター屋とソフトウェア屋がもうかる話で、僕、誰かが運動したんやと思うわ。全国学テと同じように、誰かが運動したんやと思うわ。それはそれでええよ、運動してもらって、うちのところに予算が来てありがたいことやで、教育委員会で大いに利用すればいいんだけど、そのときにどう利用するかというのは、よう知恵を出してやらんと、ただハードとソフトウェアを買わされて終わりになってしまうんで、そんなもんやったら初めから板書でよかった、大久保先生のグラフの一番けつでよかったがということになるので、前向きのほうで使う何かを考えると、あるいは結論はなくてもいいからみんなで考えようという雰囲気先生たちの間につくらんと。余り私のことを言っておったってあかんで、御検討いただいて。

○市橋（肇）委員 そういう意味では、通産の方が文科省のほうへ進出してきたりなんかしている先駆けみたいなどころなんじゃないかと思う。

○田中委員 経産省がやっておるのはそういうことやで、経済を発展させるのが経産省やで、教育のためにやっておるんじゃない。経産省のためにやっているんだ、あれは。

○市橋（肇）委員 と思われるんですよ。

○田中委員 経産省のためにやっておる。

○市橋（肇）委員 領域を拡大するというか、ニーズを掘り起こそうとしているんじゃないかとは思いますが。

○田中委員 それに乗っても乗らんでもいいので、ええとこ取りにして、輪之内はこうするんだというのを。

○木野委員 3ページの中ほどに、校務のICT化による教職員の業務負担軽減と書いてあるよね。これは、ある程度スキルを持った人は効率化できるんやけど、そのスキルを身につける前

は、逆にコンピューターがあることによって負担がふえるんだな。よそから来た人が、どの辺のスキルを持った人が来るかわからないけれども、まるきり自分に興味があつて、それぐらいのことは知っているわという人が来れば、それはこんな効率的なことはない。でも、コンピューター嫌だな、でも辞令をもらったで輪之内へ行かないといけない人やと、ちょっとこれがあることがかえってという。大変申しわけないけど、教える能力において、それほど差がなく、みんな一生懸命やっておられると思うけれども、コンピュータースキルに関していうならば、天と地ほど差があると思う。嫌な人は全然使わないので。

そうだとすると、これは必ずしも効率化じゃなくて、ストレスの原因になるという。だから、ここに幾つか書いてあるけれども、この持つ意味って全く違うんやね。その上の教科指導におけるICT活用ならまさしくそのとおりでいいです。これは、けど、その下の校務のICT化というのは、別にそんな中身がどうなんて考える必要がないので、使い方さえ覚えればいい話なんやで。その上に何を求めているかという、単純に処理するだけじゃなくて、処理している事務事業をリンクさせると何が出てくるかという新しい発想まで出てくれば。でも、そこへ行くときは、教科のICT化と同じぐらいのスキルを持った人じゃないとできないですよ。結局言いたいことは何やという、結局、ソフトをいかにできる人を配置できるかという話になってくるんで、それが一つ。

それから、ちょっと余り時間もあれなので、さっきこの計画には重要なまだ問題点があると言ったのは、これは本当は経営戦略課長さんに言ってもらったほうがいいかもしれんけれども、これを全部やると、お金が幾らあっても足りません。選択と集中という言葉が今はやり言葉になっているんだけど、まさしく一番最初の挨拶なんかで言ったのは、ハードをそろえるのも結構なんだけど、ハード整備の方向性をはっきりしてもらわないと、何を言っているかわかるよね。ヒアリングの途中で言った、パソコンも要るよ、タブレットも要るよ、それは違うやろうと。それは、120%どこかでお金があつて、よそのお金で全部そろえてくれるんなら何でも欲しがればいい。でも、そういうもんじゃないやろうと。

だから、あのときに言ったのは、タブレットならタブレットでもいい、何年か先にタブレット、トレンドからいえばそうなるんでしょうと。でも、そのときに使えるソフトのスキルを皆さんにどうやってあまねく周知させるかという部分がここにはないといかんのやけど、残念ながら、ここの情報化プランの中に、その部分が一般論としては書いてあるんだけど、じゃあ具体的に輪之内の小・中学校の先生にどうやってそれを教えていくかという部分については、まだちょっと踏み込んでいないねという部分がある。私がこれつくってねと言ってからまだそんなに時間がないんで、ここまで仕上げられたというのは大変なことだと思う。

何にもないところで、ようここまでやっていただけたなとは思うんだけど、ここまでや

っていただける能力がある先生だからあえて言うと、輪之内に要求されるスキルアップするための手順、それと、これはなぜかという、大変申しわけないけど、教育長さんにお問い合わせならんのかな、実は教員の配置の問題にも係ってくるんですね。

問題は、親分をつくらんと子分はええものには育たんで、どういう形でその部分を一本の柱として、うちはICT教育で売らなれば売らなでいいんですよ、別に。そのときに何で売れるんやと行ったときに、ここにはそういう言ってみれば教育体系がそろっていて、僕はここだけで抱え込もうなんて思っていないんですよ。輪之内の小・中学校へ行ったら、今度どこへ行ってもICTの指導者、もしくはリーダーになるようなものを、ここから出ていくときには、みんなそういうスキルを持って出ていくよというぐらいまでやってほしい。だって、現実ここでやろうと思ったら、それぐらいのスキルがなきゃできないでしょう。そのために多少人工が要るとか、要らなったら投資する意味があるじゃないですか。本当はそんなことは県がやることかもしれないが、そこの区分けはやっぱり必要。

○田中委員 そうやね。やっぱり自分たちの位置づけをしないと。

僕ね、岐阜市さんと白川村と両方つき合ってみると、それはフットワークは白川村のほうがはるかにいい。岐阜市は予算規模は大きいけど、戦艦大和なんやて。これはどっちがええか言えん。皆さんは岐阜市へ憧れるけど、それはフットワークがええのは、昔の春日村とか、それから白川村。あそこは早い、フットワークがいい。タブレットも1番に始めたね、全員に配ったの。

○木野委員 全員に配ったってそう大した金ではない。

○田中委員 だからフットワークがいいんです。

でも、あるいは教育といいながら生徒に勝手に使わせる、もうちょっと規制を緩和して勝手に使わせる機会をつくったりすると、おもしろい使い方をやり出したりするんで、子供というのはおもしろい能力があるので、例えばの話やよ。今はどっちかというに使わせん慣行のほうが多い。でも、もっと自由に使わせると、とんでもないことをやり出す可能性がある。

だけど、それを見ておって、上手にくみ上げてくれる先生が欲しい。人間が要る。特にノートパソコンよりもタブレットというのは、子供はおもしろいことに使うので、そういう夢を、そういうことをいいと行ってくれる人が要るわな。大体古くから、権威のある人やと、そんなことをやったら子供んたがむちゃくちゃになってしまっって何や知らんで何ともならんようになると思う。でも違う。子供はおもしろい能力があるので、見てみるとおもしろいなと僕は思うけど、それをやる人が要る。

あるいは、それは普通の先生のローテーションの県から配置されてくる先生方を使ったのがいいのか、地元の人材を上手に使ったほうがいいのかは僕はわからないけど、あるいは役場の

普通の一般職の方がいいのか、それもわからんけれども、そういう人、旗を振る人が1人ぐらいおってもいい。というようなことが僕は要るような気がする。町長さんのやつにすぐ屋上屋を重ねたり、同じことを言葉を変えて言っておって悪いけど。

○木野委員 いやいいや、全然違和感なく聞いていたんで、そのとおりだなと思って。

さっきの小回りがきくという話だけど、それは小回りがききますよ。白川村の村長のほうが岐阜市の市長よりも東京における時間はずうっと長い、何倍もある、正直言って。だから、変な話だけれども、最新の情報がそういうところへ先に行くんですよ。町村のほうが直接本省レベルの情報というのは逆に入っている部分がある。それだけがちょっと、そういうもんかと思って、私もその仕事に首を突っ込んで何年かしてようやくわかったんやけど。

○田中委員 それは白川はうまい。金を使わずにあれだけの名前を売ってくる、あれはブランド力だけ。金は自分たちほとんど使っていない。

○木野委員 使っていないですよ。

○田中委員 使っておらへん。うまい。

○木野委員 ついでに言うと、白川の村長は大体前職は教育長なんですよ。

○田中委員 その前は、僕、あの人、係長のころから知っている。

○木野委員 ずうっと歴代教育長から選挙で出て、村長になっているんです。だから、教育には全く関心はある、よそより。

これだって実は、この情報化のプランだって、誰もこんな、確かに文科省はつくれと言っていますけど、言っていたということがわかったんやけど、余りつくっていないよね。

○市橋（肇）委員 うん、いろんなところでね。

○木野委員 つくっていないんですよ。ごく一部の関心のあるところだけがつくっているという状況なんで。

これをつくることは、新たに知らなかったことを知るとか、世の中の流れ、少なくとも本省、霞が関の中でどう動いているかということを知るには、こういうのをやりながら、逆にうちはこのうちがあるんやからお金を頂戴と、また別のところへ行かんならん。つくればいいんですよ。よそよりもつくっていないところは、自分でつくって売り込みに行けばいいんやて思っているんです。

それで、これは2019年度、31年4月からやね。これはもうちょっと煮詰めてください。

○田中委員 大久保先生、これをつくったんだろうけど、輪之内町で、これくらいか、もうちょっと厚い、これを輪之内町はどうやってやるかという、大体外注に出すわけですよ。輪之内町と言うたらあかん。輪之内町レベルの、このくらいのスタッフの少ないところは。スタッフが少ないので、出さなしようがない。そうすると、こんな厚いやつをつくってくるわ。でも、

これは先生が自分でよくここまでやられたと思う。

でも、僕が思うに、外注に出すやつと中と両方にいろんなところでかかわるんやけど、中でやったほうがはるかに後に残るものが大きい。このものは、まあええや、こうやって町長さんが言って、文科省へ行って、こうやって見せるにはいいけど、県へ行って見せるにはいいけど、つくったときの人材が、先生1人でつくったんなり、相談した人たちは手あかとして輪之内に残るので、この成果は大きい。よく小さなところやと、第5次総合計画とかいうのをコンサルに頼むじゃん。あれは中であかん。中であかんと、少なくとも担当者は育つので、担当者とその周りが議論するので、その人たちが育ってくるので、もう絶対に先生、もう一頑張りやってください。

○大久保教育委員会主任指導主事 はい。

○木野委員 これを実施計画レベルにブレイクダウンしてくると、もっとおもしろいことができるのかなという感じ。

○箕浦委員 今、私も町長さんのお話を聞いておって、これをどうやって活用していくかが課題です。先生方に使ってくれと言っても、なかなか使えない。正直言って、現実には、今、七十何%活用しているという結果が出されていますが、なかなか中には抵抗のある先生も見えます。だから、レベルを上げるということが必要となります。

○田中委員 教育委員会項目でいくと、しようがないで使わせる、一生懸命やって、最初は違和感があったけど、だんだんみんな先生たちがなれてきて、やり出したで、やるもんやなと思って。

○箕浦委員 なかなか現実だね。

○木野委員 まずは理屈を言っているより使ってもらわなあかんで、あれなんですけれども、ただもう一つ統計のとり方として、授業で活用されていますよ、六十何%ですよと言っているんやけど、これって45分なり50分の授業の中で、こちょこちょとやったやつも含めてでしょう。

○大久保教育委員会主任指導主事 そうです。

○木野委員 だから、その使っているということの中身の問題が実はあって、机の上にB紙を1枚広げておけば同じことやないかということをつまみ投影机で投影しただけのやつでも、これもちゃんと使いましたという統計の中に入っておるので、僕はそういうまやかしの姿というのは、これははっきり言ってまやかしですよ、そんなものは。

形から入るといことはよくある話なんで、別にそこは何も悪いなんて言っていないんですよ。ただ、急速にそこの中で進化させていく部分がないと、ただ単にそうっちゃうということ。

○田中委員 大久保先生、よう頑張ってください。

○大久保教育委員会主任指導主事 ありがとうございます。

○木野委員 これをもう少し仕上げている中で、また財政のあり方も含めて、ちょっと議論していきたいなど、実はヒアリングしている中から戦略課長と話をしていました。

○田中委員 しかし、予算も予算やけど、議論を深めなあかん。

○木野委員 そう。

○田中委員 作戦を。

○木野委員 ちょっと悪いけど、このプランをこういう場で議論しているところって、まだこの周辺ではそんなにはないはず。ICT支援員を雇ったところは、こういうのがないと理屈が立たんもんでつくっておるか、そいつは知らないけど。

○田中委員 予算のツールとしてね。

○木野委員 まあまあ、そういうことです。

○中島教育委員会教育課長 じゃあ、こちらの情報化プランにつきましては、今皆さんから御意見をいただきましたように、ハードの整備の方向性とか、それから教員の支援員の関係とか、ソフト面について、もう少し意見を皆さんと議論して、よりよいプランにしていきたいと思いますので、また定例教育委員会等にも諮っていきたくておりますので、よろしくお願ひします。

では、もう一つのほうで、コミュニティ・スクールについてです。よろしくお願ひします。

○大久保教育委員会主任指導主事 では、よろしくお願ひします、引き続いて。

じゃあ、お手元の資料の、3部ありますが、これはつい先日、輪之内町コミュニティ・スクール推進協議会という会がありまして、そこでの資料です。

まず輪之内町、このコミュニティ・スクールを通して、どういう学校とか、どういう地域にしていきたいのかといった大きな枠組みというのは、まず学校運営に地域の方の声を取り入れていくということがまず第一にあります。

また、地域の人にとっても、学校と協働して取り組むことで、地域の実態をも、課題とかです、ね、なども変化させることも可能である、そういった可能性を持ったものがこのコミュニティ・スクールだと思います。

一番は、地域の方に学校教育に参画していただくことを通して、学校と地域がともに描く子供の姿、地域の姿を共有して、そして子供をさらにさらに、地域の力を使いながら、よくしていく、そういった大きな枠の中にあると捉えています。

本年度、輪之内町では、現段階がこの3つそろっている資料という形にはなるんですけども、大藪小学校が本年度先進的に取り組んでいただくという実践をやっていただきまして、その実践も他の3校がお聞きしながら、参考にしながら、こういった形にまで持ってこれたとい

うのが現状です。

どんなものかといいますと、1ページ目には、それぞれ各校が描くコミュニティ・スクールの全体構想、組織図です。

概略だけざっと話をさせてもらおうと、2ページ目にあるのが、コミュニティ・スクールビジョンシートといいまして、各校区における、また各校における子供や地域、家庭の実態がどうで、それはどういうところが問題で、それをどう克服したいのかというところを持ち、さらにどんな取り組みを通して、最終的にどういう姿にまで持っていきたいのかという大まかな青写真を描いたのがこのビジョンシートです。

これを実現するために、じゃあ年間計画でどういった会を位置づけていくのかというのが次のページになりまして、そしてさらにその役員さんというのはどういう方をお願いすればいいんだらうかという案です。

そして最後に、会則では、どういう組織に、役職にしていけばいいのかという内容について示してあります。

先日、町長より、地域や学校の何を変えたいのか、コミュニティ・スクールを取り入れることで子供たちがどうなっていけばいいのかといった御指摘をいただきまして、そのあたりもこの間の会の場で投げさせていただいております。

書いてある内容というのは、正直どの学校でも共通するよなという言い方はちょっと悪いんですけども、抽象的な言い方になってしまっていますので、もっとここを、例えば挨拶をとかですね、そういった部分をもっとこうしたいんだといった、もっと具体的な部分まで掘り下げて議論をしてくださいねというふうにしてあります。

もう一回、実は会は3月に行われていくんですけども、その会を経まして、さらに新年度、新しいスタートで動き出したときに、じゃあそれぞれの年間計画の中で、どういったことを考えていこうかというところももっと、さっきの情報化プランじゃありませんが、もっと掘り下げて、実態をしっかりと落とし込んでやれるような方向で考えているところです。

ざっと説明させていただきましたが、以上です。

済みません。もう一点、つけ足しをします。

事前に町長にお見せした中で、会則部分ですね、特に委員の選考につきまして、例えば区長代表1名とか、民生委員代表1名とかという言い方になっているところですけども、充て職というふうになってしまっていて、これは選任のいろんな考え方を取り入れていくという点においては非常に狭い考え方になってしまっていますので、これをもっと選任自由度が広がるような、もう少し幅を持たせた表現に変えていくようなお願いも一言……。

○木野委員 ちょっと私もそれが回ってきたときに余計なことを言ったかしらんけれども、今

までずうっといろんな協議会なり何なりというのは、かなり充て職があるんだよね。あれの意味するところは何やといたら、例えば区長とか、民生委員とか、何とかかんとかといって職を持った人が肩書でもって参加しているのがそうであって、ちゃんと区長会に諮ったから、ちゃんと議会に言うたとか、議会代表の人がおるがなということ言うには便利だ。

でも、今の充て職の状況を見ていると、例えば区長にしても、ほかの者にしても、みんな回り番みたいになって回している状況が多い。一番困るのは、1年間の会議を通じて一回も発言せんで終わってしまうなんていうことになってしまう。

だから、そういう意味で、別に代表、どんなものが欲しいかということでは、ああいうふうに書いたって別に構わんのやけれども、それを充て職的な書き方にするのはいかがなものかなと個人的に思ったもので、その辺についてちょっと考えてねということはいいましたが、そこは逆になれば、それぞれの校区、これは多分小学校と中学校でも違うやろうし、3小学校でもそれぞれ何か違う、それはそれで違うことは構わない、違って当たり前と思うんやけど、物の考え方として、形だけ整えるという言い方じゃなくて、実態できるようにできる人をもう少し参加できるようにしてねという思いだけです。それ以上でも以下でもないの。

○田中委員 同じことを検討会をやっておるときに言った気がするんですけどね、充て職で、本当言ったら、大藪小学校の一番最初に、1年前のときにずうっとやっていると、議論が進まないのですわ、委員が何を役をするというのは。それで、仮に名前を入れた。そうしたら話がずうっと進んでいった。

それはどういうことかという、僕の経験では、町長さんが言われるのと一緒に、充て職で来る人はじいっと黙っておるし、それから変なことを言うてもいかん、自分の団体を持っておるので。今僕が発言するような好き勝手なことは言えんわけやよね、後ろの団体があるから。言ったらやらんならんし。そうすると、黙っておるよりしようがない。

そうすると、フリーにしゃべる人がやっぱり3人ぐらいはおらんと、議論にならんだな。よくマージャンに会議を例える人がおって、4人やと議論が進むと。でも、僕の経験からいくと、3人ぐらい入っていないと議論にならない、自由闊達な議論には。自由にしゃべる人というのは、学識経験者と書いてある神戸さんとか、ああいう人だけなんやね。でも、本当は3人ぐらい欲しいんやね、好き勝手にしゃべる人。区長さんとかいうのはかわってってしまうし、本当はね。

でも、輪之内だと、人数を上げていくと、どうやって上げてても同じ人になるんだわ。そこが悲しいところで、輪之内町でやられる委員会って充て職ばかりでつくるんやね。しようがないね、これ。

○木野委員 まちづくり基本条例では、公募委員でつくることになっているんだけど。

○田中委員 僕、大学におったんで、今、大学教授というのは公募するのがはやりなんで、するんだけど、優秀な人は、三顧の礼を尽くして、金のわらじを履いて、三顧ぐらいやなくて、足しげく通って、玄関の前で座り込みするぐらいして連れてこんと、いいのは連れてこれん。手を挙げて来ておる人は、次のところへ手を挙げていくんで。僕はそう思う。

これは、名前があって、この肩書をつくって、名前を消してここへ出してあるんやな。そのうちに考えると、これは悪いことに、この肩書が残っちゃって、名前だけを変えるようになるんや。違うんやで。ここにある隠してあるこの人に発言してほしいという考えでないと、活発に議論できない。事務局がつくったのを、ああ結構ですなというふうになってしまうんで、そうすると下へ浸透する効果がないので。

○木野委員 そこが非常に難しい。

○田中委員 それからもう一つ、この間、岐阜市のプログラム教育何とかいうので、プログラム教育やと思って、勉強しなあかんと思って行ったら、プログラムの話は少しで、ほとんどコミュニティ・スクールの話で、東京大学の牧野篤とかいう先生が来てお話しになっておるのは、地域の人が地域をどう活性化するという話。学校を支援する話やなくて、まあするんだけど、学校をもとにして、地域の、例えば僕らみたいな時間に余裕がある人をどう活用するかという話。例えば輪之内やと祭りがだんだんっていくので、ああいうのを一緒にして、もっと新しい住宅で来たような人たちも一緒になってやっていこうという会をつくりましょうというのが趣旨やった。それに今は、輪之内の場合は住民と非常に密接にやっているし、住民の人たちも学校というのが心のよりどころになっているわけよ。中学校が弱いけど、3校はきつとなっておるんよ。そうすると、それでいいんだけど、これからもう一世代行ったときには、ばらばらになっていくので、そのときに地域をまとめるのがこれだという考え方だと僕は読み取った。後で、そればかりやる部会があったので、そこへ行って聞いておったら、そういうふうにした。それで、学校のエゴの話もあってもいいけど、学校をもとにして、地域の人間をどう、箕浦先生が一生懸命やっている地域づくりの会とかいうやつを一体化して、まちづくりだというふうには僕は読んだ。

○木野委員 そういうことやと思いますよ。

○田中委員 コミュニティ・スクールというのは結局そういうこと。

ただ、輪之内の場合はもうできてしまっておるので、形だけやればいいので、住民の参加も非常にいいし、例えばさっき松井さんが持ってきた薩摩義士の踊りをやるとか、稲穂祭りをやるとか、非常にあれしたやつがあるので、もうこれ以上やると学校がオーバーになるくらいで、学校としては負担だけやけど、町長さんとしては、地域づくりということで考えたら、住民をまとめるの、輪之内は今、羽島のほうを向いておったり、海津のほうを向いておったり、大垣

のほうを向いておるので、これをくっとまとめるには、いいツールになる。

○木野委員 やましい考えは持っておりませんが、これ、基本的には……。

○田中委員 いやいや、僕が言っておるやなくて、牧野何たらという先生が言うには。

○木野委員 コミュニティ・スクールという表現が、逆に自縄自縛に陥っちゃって、学校から考えたコミュニティーづくりになっちゃっているんで、それはいかんのですよ。たしか前に申し上げたと思うけれども、コミュニティ・スクールというのは、こちら側から見ればコミュニティ・スクールだけでも、そもそも義務教育、小学校、ましてや基礎教育を担っていたのは、もともと歴史的な沿革からいえば、地域が担って、そこで必要な教育が、何とかして育てていきたいと思うから、そこに地域がまとまって寺子屋をつくったり、いろんな教育に何かなってきたはず。もう一度原点に戻りましょうと。

今は正直言って学校の管理のほうに優先されちゃって、余計なことをやると今は特にマスコミがうるさいからね、余計な問題が起きるとすぐ学校のせいやと言われちゃうんで、そんなことを言われたくないと、どうしてもやっぱり自分がきちっと見られる範囲でまとまったほうが管理しやすいですよ。極端なことを言うなら、校庭を開放するよりも、塀をつくって出入口の管理をしたほうが学校の管理はしやすい。

でも、短期的にはそれでいいのかもしれないけど、長期で見たときに、学校はそれでええのかと。そんなんやったら、仁木小学校がどこかにあったってええやろうという話になっちゃう。仁木小学校が仁木地区にあることに意味があるとするならば、地域とともに歩む以外にないでしょうという、そこから出発している。私立の小学校やないので、こんなところでやっておれんわとって、どこか大垣にあった私立の学校が岐阜へ行ってしまっただけという話は絶対にできないんだから。公立の義務教育小学校というのは、その地域から逃れることができないのやったら、やっぱりその地域と一緒にやっていくことを考えるべきやし、そこがやっぱり基礎教育の原点なんや。

そのときに、実はコミュニティ・スクールといったときに、そんなのほとんどのことを今やっているやんという。やっている部分があるんですよ。でも、それがどういう位置づけでやられるか。それをやることによって、単なる個人的な満足なのか、それとも地域として盛り上げないかという一つの大きな大きな動きになってくるのか、その違いだと私は思っているんで、コミュニティ・スクールという、こちら側から見た中身じゃなくて、地域の中から見れば、このコミュニティ・スクールって何者ぞという、違うタイトルがひょっとすれば本当は出てくるかもしれんのですよ。そこと裏表の関係になって動きが出てきたときに、これは本物になるやろうと。これは10年ぐらい前からやっていますよね、最近の話じゃなくて。先行しているところは10年前。

○田中委員 昔、学校評議員というのをやってあって、ほとんどその形を、委員も踏襲してやっ
てもらったけど、学校評議員というのは学校なんやね、主体は。

今度は協議員という制度になって、地域の代表の意見なんやね。学校だけで成り立つという
ことではないということになってきたんやね、今度は。名前を書いただけが楽やぞというて大
藪の校長先生が言って、結局そうしたいんだけど、名前はそうなんだけど、メンツもそうなん
だけど、実は仕組みとしては180度変わったなど。

前は、評議員なんで、学校はこうやってやるで、おまえらよう知っておれよとかいって区長
さんに言う会やったんやね。意見も言う、勝手に言えばいいよというけど、今は承認しないか
んのやで、それは説明も違うし、説明をようわかるようにするには、日ごろからのコミュニケ
ーションが必要になってきた。住民としても、評議員として、主体的に参加することができる
ようになったんやね。そこのところが大きなところで、この間運動会を一緒にやるかやらんか
をずうっと議論して終わってしまった学校も多いみたいやけど、そうではないというね。それ
もそう、そういうことなんやね、そういう議論をせないかんのや。

○市橋（肇）委員 ちょっと教えてほしいんですけど、この赤字で書かれていることとか二重線
を引かれているのは、案とはしてあるものの、どういう意味でこれが引かれているのか、違う
色にしてあるのか。

それから、学校運営協議会の組織図の最初にある地域支援部会だとか、学校支援部会だとか、
学校評価部会の名称もばらばらだから、いろんな意味でばらばらなところに詰められた、それ
ぞれのこの案をつくった人の思いがあるのかもしれないんですけど、とにかくそこら辺の違い
がなぜ出ているのだろうかということ。

それから、中学校なんかでは、より具体的な事項が並んでいる、今考えられることとして。
ですけど、先ほど、運営計画書という段階では、これから集まってこれを煮詰めていくという
ことで、とりあえずこういうコミュニティ・スクールを出発するに当たって、校長先生とか、
どこかの事務局の方が考えたことで、これは今、案で出しているんであって、実際には最初の
集まりだとか、任命してから、そのメンバーが集まってから方針なり何なりが決まっていくこ
となんだろうと思うんですけど。

先生、いろいろおっしゃっていたんだけど、文科省が出されてコミュニティ・スクールとい
うのは十何年ほとんど進まなくて、最近になって急速に進んで、その中で箕浦先生が指導され
て、キックオフされていくということは非常に意義があると思うんですけど、結局は僕、こう
いうのって実践活動で、どこから出たというシーズじゃなくて、ニーズがあるかどうかで、自
分たちのものとして自前化できるかどうかでこの項目というのが決定して、自前化できるよ
うな人を選ばなきゃいけないのもそうだし、目標をつくらなきゃいけないのもそうだし、実践し

ていくに当たっての活動計画をつくるのも、やっぱりニーズがあって、自分たちでやるというふうにできるだけ持っていかないと、何となく机上の空論で議論ばかり出てくると。

それから、もう一つだけちょっと疑問に思うというのは、ちょっとあるのは、一番右に評価部会というのがあるんですよ。いかにも評価してPDCAサイクルを回していくのにそういうところがあるというのはいいことだけど、その評価部会のところだけに名前があるという人が、いかにも俺はそれを評価するためにおるんだぞというようなメンバー構成では余りよくなくて、ほかのところにもちゃんと、実践活動のところにも関与していた中で自分で評価していく、自主評価する、自己評価するという立場でいいんじゃないかなと思って。ここにしか名前が出てこないという人は余りよくないんじゃないかなと僕は思いましたけど。

そんなようなところで、それぞれの役割とかいろんなもののニーズはまだ自前化できていない。だから、ちょっと形式的になりがちだと思うんですが、とにかくこれから活動するに当たって、先ほど町長さんもおっしゃったんだけど、ローテーションで選任された人じゃなくて、自分でやる気のある人がメンバーになっていないと、これはちょっとなかなか難しくなるのかなというのをちょっと感じます。

○**箕浦委員** この組織に関しては、まだ確定はしていません。それから充て職は、私、本当言って、よくないと思うんです。やっぱり動ける方に入っていただける組織をつくって、部分的に直していくとよいと思います。やっぱり部会も3つつくって、この中で実際に動く人を入れて、だんだんと動く方を中心に持っていくとうまく運営できると思います。

○**市橋（肇）委員** はい。

○**箕浦委員** ごめんなさい。これからです。

○**田中委員** 評価部会は、年度の初めに校長先生が、我が校はこういう方針でやっていきますとあって、それじゃあそれで承認をすると今言ったね。それが一つ大きなポイントと、一番最後、年度の終わりのときに、こうやってやってきました、先生たちがこうやって自己評価をやるよ、こうこうこうですというので、じゃあ協議員会としてはこれでよろしいですかというところで、じゃあこれは結構です、いや、こんなもんでとはかという評価をするわけです。それが評価部会。

○**市橋（肇）委員** それで、その評価部会が一番やらなきゃいけないことは、それはいいんですよ。今やってきたことを評価するということはそれでいいんですけど、じゃあ次、それを踏まえてスパイラルアップするのに、これから何をやるかということが提言できるような人がいてほしいなと思います。

○**田中委員** 済みません。僕は充てる役はなかったもので、大藪小学校で評価部会長なんで、申しわけないですが、言われたように努力をしますので、入れる段にして、僕ともう一人いるん

ですけど。

○市橋（肇）委員 いや、僕ちょっとわからないんですよ。しゃんしゃんしゃんと終わらせるための評価なのか……。

○田中委員 違う違う。

○市橋（肇）委員 それともちゃんとステップアップしていくのか、どうなのかということをお伺いしたかったです。

○田中委員 これはシビアに評価して、評価のときに学校のあれを承認するときに、がちでぶつかったときにどうするというのを定例会で、僕、議論したと思うんですよ。意見がぶつかったとき、学校がとまってしまうよね、この仕組みは。一生懸命校長先生方がやっておるのに学校がとまってしまうので、そのときどうするというやつを言った覚えがあるんですよ。

そのときは、意見がぶつかったときは首にできるんです。何ともならんようになったときをつくっておかんと、とまってしまったときのために。

○箕浦委員 あるやないですか。

○田中委員 1年ごとでもう一回任命し直すようにしてある。これはしようがない。がちにぶつかったときに、打開策をつくっておかんと、それで任命権が教育長にある。教育長やったね、任命権は。これをやっておかなあかんので、それは仕組んである。評価のときに、それが問題になる。

○木野委員 何でも言えばいいという評価委員会ではないので、学校経営の大きな目標があるはずですから、そこと不整合にならないように、将来方向をどうやって見出していくか。そういう方でないと、評価委員会の部会長にはなってもらっちゃ困るんです。自分のことだけ延々としゃべる人は要りませんので。

○大久保教育委員会主任指導主事 先ほどの御質問の……。

○市橋（肇）委員 ええ、この赤字のね。

○大久保教育委員会主任指導主事 ですが、これは例えば会則の中にはそういった部分もたくさんございますし、あと仁木小学校のシーズの中に出てきていますが、これは例えば組織図のほうでいうと、前の提言から変わってきた部分といった部分で示しています。会の提案資料ですので、前回から御指摘をもらって、こういうふうに変えましたといったところのです。

○市橋（肇）委員 変更点だ。

○大久保教育委員会主任指導主事 変更点という意味で。

○田中委員 この間のときは赤がなかったんじゃない、あった。

○大久保教育委員会主任指導主事 仁木はあったと思います。

○中島教育委員会教育課長 カラーじゃなかった。

○田中委員 白黒やったでわからなかった。

○松井教育委員会教育課調査官 福東はこの黒の二重線のが前回からの変更点で、28日に出した内容ですね。

○大久保教育委員会主任指導主事 それから、この会則の部分でいいますと、3校横並びにしてみると、よく似ている部分がいっぱいあるんですけども、大藪小学校の会則がベースになっていますので、その中でうちの学校ではこの部分をじゃあうちの色を出すというふうで、その学校の特徴といいますか、の部分がアンダーラインになっていると。

○市橋（肇）委員 だから、部会の名前とか何とかも自分のところの名前、自前化した名前を出しているから、それなりの意味合いがあるということですよ。

○大久保教育委員会主任指導主事 そうですね。

○木野委員 部会を重複して所属するということができるのかね。

○大久保教育委員会主任指導主事 それは学校の裁量でやれると思います。そこまでうたっていないと思うので。実際、前回の話し合いの部分でも、じゃあ誰がどこに所属するのという話、単純にいけば1人1個ずつどこかの部会に所属するといったのが一般的なんでしょうけれども、今のお話にあるように、やっぱり全体が見えていないといけない部分の方もいますし、その辺は学校の裁量でいろいろやれるのだと思っております。

○木野委員 そうだよ。評価部会だけに所属しておいて、ほかの部会活動に口を出せんのやったら、何かちょっとやりにくいよね。僕は重複しておったっていいと思うよ、運用としては。そもそも10名という、これ10名って大藪か。

○松井教育委員会教育課調査官 町の規則をつくってあるんです。

○木野委員 10名以内と書いてあった。

○松井教育委員会教育課調査官 以内という。

○木野委員 それはちょっとまずいと思うよ。

○松井教育委員会教育課調査官 少ないですか。

○木野委員 いや、多彩な意見を吸い上げると思えば思うほど、10人というのは、しかも充て職的運用の中で10人といったら、フリーランスの人が入り込む余地がほとんどないよ。だから、そういう意味で充て職ってどうなのという話。

それか、もしくは10人が適切なのか、いたずらに数をふやせばいいというものではないけれども、基本的に10人だよと言っておいて、そこのプラス・マイナスは、やっぱり裁量に任せる部分があってもええのかなという。

○田中委員 フリーランスで10人やとどえらい個性の強い会になってくるな。3人ぐらいがいいなと思うけど、僕は、フリーランス、普通の運用委員会とかで。

○松井教育委員会教育課調査官 最初につくったとき、ほかのところを見たら、結構大きいところは20名とか、いろいろ大きい数字のところがあったので、20名集まってもなかなか会議としてやりにくいというのがあって。

○田中委員 この間、大藪を除いた3つの部会でやってみえたときに、仁木かどこかで、いろんな会を、PTAを入れたり何や知らんを入れてくるときに、老人クラブという話があって、そこまでやらんでもいいなと言ってみえたんやね。

○松井教育委員会教育課調査官 福東ですね。

○田中委員 福東か。見守りとか、老人やで、暇やで、何や知らん剪定ぐらいやれとかいうことやと思うんやけど。

○松井教育委員会教育課調査官 老人クラブともう1団体が出席していました。

○田中委員 そりゃあ上から言ったらええけど、下から俺らにやらせろという意見が出てこんど、おまえらやってくれと言うたって、俺ら忙しいがと言われたら同じことやで、老人クラブで僕は副会長で言っておってはいかんけど、そんなもん個性の強い人間ばかりおるんやで、それが老人クラブなんやで、それにやれと言ったって無理やで、俺にやらせろと……。

森林文化アカデミーってあるがね。あそこで剪定講座をやるんやってね。そのときに、剪定をやるんやけど、例えば僕らみたいなやつは来んのやな。アパートかマンションに住んでおる人がやるんやってよ。そうすると、やってみたいんや。どうするんやといたら、知り合いのところに酒を1本持って行って、やらせろとって言うんやという話を教えてくれるそうや。そういう人がおればええけど、みんな輪之内の人は自分のところをやるので精いっぱいやで、それはどういう、向こうから出てくるかわからへんので、充て職で入れられた会長さん、御苦労さん、気の毒やな。

○木野委員 だから、充て職が余り多なると、今度は早う終わらんかいというような顔をして、何もしゃべらずにおるとい話になったら会の意味がないです。今これを見ると、ちょうど今13人いる。大体テーブルを囲んで、いろんなことが言えるぐらいの人数。これ以上ふえるとあかんでしょうから。10人にこだわる理由はないと思います。

○松井教育委員会教育課調査官 ああ、そうですね。ちょっと自由度は必要かなと思います。

○木野委員 基本的に10人なら10人でいいですよ。

○松井教育委員会教育課調査官 はい。

○木野委員 プラスアルファがあってもええなという感じだな。

○松井教育委員会教育課調査官 またちょっと……。

○箕浦委員 私思うのは、仁木小なら仁木小の特色ある活動が必要です。私は、仁木の会に出ておりました。米づくりについて、いろいろ議論されました。そんな昔から、種まきから全部体

験をさせなくてもええやないかという意見もあるし、それはそれで意義があるとか、いろんな意見がありました。時間数の関係もあります。何もみんなやらずに小ぢんまりしてしまえば、それは特色というのは出ません。何かそのあたりもコミュニティーという観点で全ての教育活動を見直して、重点化して、何か力を入れてやっていくと、学校が活力が出てくるなど私は思います。

○田中委員 それからもう一つ、学校といえども社会と調子悪くなることって、どんな組織でもあると思うんやね。会社でもある。そのときに支えてくれるのは住民なんやね。

このごろ国土交通省でも河川整備をするのに住民を入れるがね。僕、岐阜県の河川整備検討委員というのをやっておった。僕、治水のことなんかわからへん。でも、植物か何か自然環境で入ってくれという話で、ずうっと入っておった。治水の人はほんのちょろっとで、大部分、例えば学校の校長会代表とかいうのが入ってくるわけよ。この時代なんで、何かあったときはやっぱり、学校だけで行けるんなら行ってみなと言われたときに、やっぱりそういうシンパをつくっておかなあかんよ、学校としては。教育委員会だけで行けるんやったらやってみなと言われたときに、その先々の節目としてもやっぱり住民は味方にしておかんと、独断と偏見で僕が連れていったんで悪かったけど、松阪の相可高校というのが、住民、それから地域とフォローでつくっておる。そうでないと金太郎あめみたいな高校になって、いざというときに、統合するときに、ぴっと上げられて終わりになってしまうので、地域と密着しなあかんのやて、これからは。と僕は思う。そうすると、これはいい組織。

○木野委員 だから、これをつくらなあかんでという受け身の形で組織しちゃいかんと思いますよ。

○市橋（肇）委員 先ほど原点回帰みたいな話をされたじゃないですか。昔は教育を受けたくて、おらが村にも小学校が欲しいんだと、寺子屋から始まったのかもしれないけれども、だからその当時はニーズが物すごくあったと。今、余りにこうやって整備するもんだから、当たり前みたいなになっちゃっているから、原点に回帰する意味でも、地域に根差した小学校なり中学校の運営が必要なんだという意味で、改めてこういうニーズを打ち出したんじゃないか。

それから、そういう当たり前になっている中で、子育てをやっていくときに、無関心層がいっぱいふえてしまったから、もう一度学校運営の中で子供たちに関心を持ってもらいたいんだというところが、ニーズとしてコミュニティー・スクールがあるんじゃないかなと思っていますけど。

○木野委員 よく地域で学校経営を考えたときに、よく学校統合が話題になるんだけど、学校統合は政治家の命取りになると言われているぐらい難しいものなんです。何で難しいのと。それは、そこにある学校をどうするかということについて住民の声がとれないからなんです。

そういう意味でいうなら、これがきちっと機能しておるんなら、どうなのとってここへ投げかけたときに、いや、一緒になってやったほうがいいねとか、もうちょっと頑張ろうやと、方向が、地域の意味というのが、今、地域の意味と言われているものは、声の大きい人の意思なんであって、必ずしも地域の意味じゃない部分が多いんです。でも、コミュニティ・スクールできちっと議論しておれば、それは誰か声の大きい人の議論じゃないはずやから、統合するにしたって、独立して頑張るにしたって、結論は皆さんが納得できる結論になると私は思っておるので。

うちの場合でいうと、まだそんな統合がどうのこうのなんていって、そんな状況では決してないし、まだどこかではふえておるところもあるくらいなんで、ばらばらですけどね。だから全然そういう状況ではないんだけど、そういう時代の変化に即応する中で、地域の意味というものをどうやってまとめていくかという、もう一つの考え方がやっぱりそろそろ根づいておってもええんだらうという意味で、これは10年前にコミュニティ・スクールを始めたかもしれないけれども、今日的意味を持っているので、今この段階でやりましょうという話。もうここまでやっても、大藪で1年間やっているんで、コミュニティ・スクールって何やという人は、それなりに掲げてやっている人の中では、コミュニティ・スクールって何やという人はだんだんいなくなっただけ。

もうちょっとやっぱり皆さんに知っていただくことが大事だろうし、そのために誰が動くかということ。やっぱり自分でムーブメントをつくり出す能力がある人がそこへ入っていないと、押しつけられた組織で終わっちゃう。

○田中委員 済みません。僕、1年かかって委員長をやりまして、大藪小学校でようやく先週か先々週、飲み会をやることができました。そこまでこぎつけました。でも、とてもよく盛り上がったので、ああ、これはよかったなど。

○木野委員 その飲み会をやった話は、私もすぐに翌日ぐらいに耳に入りましたけど。

○田中委員 あの金、時間かかるね。

○木野委員 これはやっぱり今の段階としては避けて通れないと。

○田中委員 学校をちゃんとやっていくには、学校の独立性という言葉は悪いけど、やっていくにはもうこれで。

○木野委員 後を渡すのが大変やと思うんやて。

○田中委員 本当に大変でございますわ。

西松先生はそんなんやらんでもいい。そうやわな。仕事がふえるだけやと。

○木野委員 それもそりゃあ、あながち間違いではない。何かものをやろうと思えば手間暇はかかりますよ。やらないより、やったほうが手間暇かかるよ、間違いなく。でも、それをやる意

味があるならいいです。

○田中委員 でも、校長先生、初めはかあつとして嫌がっておったけど、ちょろっとスイッチが入ったら、今どえらい調子ええもん。

○木野委員 何でも要するに半歩先にして、先駆的な事業を周りもやっていると、それは元気が出ますよ。そういうもんですよ。

○田中委員 小椋先生がどえらい乗ってくれたで、ようやくこの飲み会まで。

○木野委員 いやいや、本当やと思う。それはコアになる立場の人やから。

○田中委員 校長先生、乗ったなあ。

○木野委員 どんどんちょっともう少し深掘りしてもらって、いいものにしたいなと思っております。

○中島教育委員会教育課長 では、コミュニティ・スクールにつきましても、本当にもっともつと住民の方とにかく知ってもらおうよというので、この前の委員会のときも、区長さんもその都度その都度みんなに話していると。それで、どんな形でもいいから、とにかくいろんな形で好きなことをやればいいんだから、みんなにいろんなことに参加してくださいということ浸透させていきたいというふうにすごくおっしゃって見えまして、教育委員会としても、とにかく住民の方、みんながこれを知っているという形に進められるようにやっていきたいと思っていますので、もう少し、あと一回まだ今年度ありますが、4月からスタートできるようにやっていきたいと思っています。よろしくお願いします。ありがとうございました。

では、一応本日の会議の中の議題はこれで終わりなんですけど、その他で何かございましたらお願いします。

○田中委員 ここ1週間ぐらいのニュースで、いじめか何か知らんがあつて、情報公開せいと言うたら、ありませんいうて言われてどうのこうのというのって、どうも雰囲気、輪之内町とかこれこれ10年近くおつき合いしていると、これはプライバシーだとか、これは何や知らんだとか、人権にかかわるとかいうて、抑える方向で検討するんやね。

公文書というて役人の人たちがおつくりになる文書は、全てメモ書きも公文書だというのは、たしか昔の国会か何かで議論があつたのに、これ、何かしないと、ここへ、輪之内がそういう対象になるような子があつてはいけないけれども、来たときに、ちょっと教育委員会の話やないと思うんですよ、向こうの話やと思うんやけど、町長さん部局の話なんだけど、それを一遍やっておかないと、行政としては、行政というか、僕がここにおける立場やったら、どうしてもこうなっていくもん、出さない方向に。そうしたら、今度社会からばあんとやられたときにお手上げになってしまうので、国か何かの基準があるものか。

○木野委員 情報公開ってやつは、本当に極端な考え方がぶつかり合っている話なんで、もう全

部出してしまえという人から、誤解を招くで出さんでもええという人までいろいろあるんだけど、今回ニュースになったのは、市町村が出さへんかったやつを県のほうで公開請求して、県が市町村からもらったやつまで全部出しちゃったという、それではれちゃったと。市町村が出さなかったのに県のほうから出てしまったという話があって、あれはあれでちょっと話があれなんで……。

○田中委員 ちょっとずれる話か。

○木野委員 違う。あれはあれで、逆に言うと、県の情報公開のあり方について、我々市町村の立場からすると物すごい問題なんです。

○松井教育委員会教育課調査官 問題は、その提供を受けたところへ聞かないといけない。

○木野委員 あれは、本来は原義を持っているところへ聞かないといけない。

○松井教育委員会教育課調査官 そう。

○木野委員 あんなことをやられたら、集約化したところから、全部ばれてしまう。

だから、それはちょっと、私は今、田中委員が言った意味と違う意味で、あの情報公開について問題ありと思って捉えているんだけど、そうじゃなくて、そちらのほうはそうじゃない……。

○田中委員 僕は、そこまで行かず、単なる情報公開という言葉だけの……。

○木野委員 それで、我々もやっぱり情報公開について一つのいろんな考え方というのは、当然国の指導もあるし、うちの考え方もあるので、当然持っていなきゃいかんし、その基準から外れたものについて、私は120%出せとは言っていません。だけど、相手方が物事を正確に理解するために必要なものは出すべきやと私は思っている、我々にとって不快なものであっても。そうじゃないと隠したと言われるので。そこが非常に難しいです。何をやったって多分言われるんですよ。100%出さない限りは、出せと言った人は満足しないし。

○田中委員 100%出しても不満足かもしれないしね。

○木野委員 まだあると言う人はおるんですよ。もうこれ以上ないと言ったって、あるやろう、あるやろう、あるはずやと。特にいじめとか何とかいう話になると、逆に言うと、ないと言えないという状況が出てしまうことがある。何やそれ、対応しておらへんという話になっちゃうんで。

○田中委員 なるほど。

○木野委員 ないとは言えないんやけど、実はないと。

○田中委員 規則に書いてあるけれども、やっていない。

○木野委員 今までそういう話はいっぱいある。だから、文書不存在やとか。文書不存在ってどういうことと。そういう問題があります。

だから、情報公開については、流れは基本的にオープンにしようという流れはありますけど、そこはやっぱり、うちもあれですよ、情報については、情報公開の審査会なんかやって、必要な人の意見を聞いて、その中には弁護士さんとか、そういう方も交えた中で最終的に判断していますので、今までのところでは、出した出さんでもめた、出せと言われたことはあったけど、すごくもめたことはありません。これからはあります。

○松井教育委員会教育課調査官 何で出さんのや程度はあって、再度審査会にかけたことはありましたよね。

○田中委員 でも、これからあるわな。

○松井教育委員会教育課調査官 あるでしょうね。

○木野委員 形だけの審査会で終わらない。やっぱりきちっと判断してくれる第三者的な委員会が必要だということは当然だと思うし。そういうことなんですけど、うちもいじめにしても何にしても全くないなんて誰も思っていない。

○田中委員 子供がおれば、いざこざはあるわな。

○木野委員 子供がおりゃあね。自分の存在って、人にとって邪魔なんやて。誰かがうまいことを言っておったんやて。生きているということは、人の生き方を邪魔するんやと。

○市橋（肇）委員 逆の言い方やね、ネガティブな。

○田中委員 きょうのテレビ、ワイドショーみたいなやつでやっておった。女の人3メートル以内に人が入ると不愉快なんだってね。

○市橋（肇）委員 女の人と言ったらだめ。

○田中委員 違う違う。台所か何かに、嫁さんとしゅうとめが入るとか、そういう話のときに。

○松井教育委員会教育課調査官 ああ、そういう意味ですか。

○田中委員 僕は別に何も思わへんけど。

○木野委員 本当に情報のあり方というのは、どこかでやっぱり保険をかけていかなあかんです。

○田中委員 常に考えておらなあかんのやわ。ニュースが出たたびに、輪之内のときはどうやろうとか。例えば教育委員会になったときにはどうやろうというのを考えていないと、だんだん自分の論理になってくるでね、人間というのは。

○木野委員 情報を公開するときには、誰が公開するかも大事なんですよ。だから、よく言われるのは、責任を持つ最高位の人が出て行ってやれという、そうしたら知事が全部やらんならんとか、市長村長が全部やらんならんとか。でも、その人たちが一番知っているかどうかはまた別やろうね。

○市橋（肇）委員 無理でしょうね。

○木野委員 どの部分にターゲットを絞るかという、本当は情報を要求するほうも形に捉われる

んじゃなくて、どこを攻めるべきかを多分考えないかのやろうし、こっちも知っている人をきちっと出す。そのときにどうしても格好が要るんやったら、そばにおればええんで、そこら辺のやっぱり保険はきちっとかけながらやっていかんと、ちょっと難しい。うちでもこれからいじめみたいなものはいつでも起こり得る可能性はあるんだから。ないなんていうほうがおかしいやろう、そんなもん、人間が活動しておる以上はと思います。

○中島教育委員会教育課長 よろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○中島教育委員会教育課長 それでは、長時間にわたり御協議いただきましてありがとうございました。これをもちまして、第2回総合教育会議を終わりたいと思います。ありがとうございました。

(午後9時17分 閉会)